住吉祭

與謝野晶子

海辺の方ではもう地車の太鼓が鳴つて居る。横町を通る人の足音が常の十倍程もする。子供の声、甲高な女の声などがそれに交つて、朝湯に入つて居る私を早く早くと急き立てるやうに聞えた。此処に近い土蔵の入口に大番頭が立つて、

『真鍮の大の燭台を三組、中を五組、銅の燭台を三組、大大のおらんだの皿を三枚、錦手の皿を三十枚、ぎやまんの皿を百人前、青磁の茶碗を百人前、煙草盆を十個。』

と中に入つて居る手代に手びかへを読み聞かせて居る。

『畳二畳敷程の蛸がな、砂の上を這ふてましたのやら

う。そうしたら傍に居た娘はんがびつくりしやはつてきやつと云やはりましたで。』
『ほんまだすか。』
『真実(ほんま)だすとも、うはばみのやうな鱧(はも)もおましたで。』
『まあ、さうだすか。』
井戸端で、昨夜の夜市(よいち)を見て来た女中が外の女中とこんなことを話して居る。時々思ひ出した様に何処(どこ)かでこほろぎが鳴く。湯から上(あが)ると縁側の蒲筵(かまむしろ)の上に鏡台が出してあつて、化粧役の別家(べつけ)の娘が眉刷毛(はけ)を水で絞つて待つて居た。青い楓(かへで)の枝に構(かこ)まれた泉水の金魚を見ながら、頸(くび)のおしろいを附けて貰つて居ると、

近く迄来た地車(だんじり)のきしむ音がした。

牡丹に唐獅子竹に虎虎(とらとら)追ふて走(は)しるは和藤内(わとうない)。

こんな歌も聞(きこ)えて来た、さうすると三つの井戸の金滑車(かなくるまき)がけたたましい音を立てて、地車(だんじり)の若衆に接待する砂糖水(みづ)を造るので家の中が忙しくなる。

『旦那様、ありがたう。御寮人(ごれうにん)様、ありがたう。』

その世話人が四五人家の中へ入つて来て父母に挨拶をした。揃(そろひ)の浴衣(ゆかた)に白い縮(ちぢみ)の股引(ももひき)を穿(は)いて、何々浜と書いた大きい渋団扇(しぶうちは)で身体(からだ)をはたはたと叩いて居る姿が目に見える様である。白地の明石縮(あかしちぢみ)に着更(きか)へると、

別家の娘が紅の絽繻珍(ろしゆちん)の帯を矢の字に結んでくれた。塗骨(ぬりぼね)の扇を差した外に桐の箱から糸房(いとぶさ)の附いた絹団扇(きぬうちは)を出して手に持たせてくれた。店へ行く廊下を通る時大きい銀の薄(すゝき)のかんざしの鈴が鳴つた。菊菱(きくびし)の紋を白く抜いた水色の麻の幕から日が通つて、金の屛風にきらきらと光つて居た。従兄(いとこ)と兄はその前へ置いた碁盤で五目並べをして居る。将棋盤の廻りには十人程の丁稚(でつち)が皆集(あつま)つて居た。花毛氈の上であるから並んだその白足袋が美くしく見える。九谷焼の花瓶に射干(ひあふき)と白い夏菊(なつぎく)の花を投込(なげこみ)に差した。中から大きい虻(あぶ)が飛び出した。紅の毛氈を掛けた欄干(てすり)の傍へ座ると、青い紐

を持つて来て手代が前の幕をかかげてくれた。向ひのおてるさんが待つて居たやうににこやかに目礼した。道の人通りが多いので常(つね)のやうに物を云つても聞(きこ)えさうではない。水色の透矢(すきや)の長い袂(たもと)と黒い髪が海から来る風で時々動くのが見えるだけであつた。氷屋が彼方此方(あつちこちら)で大きい声を出して客を呼んで居る中へ、屋台に吊つて太鼓を叩いて菓子売(うり)が来た辻に留つて背の高い男と、それよりも少し年の上のやうな色の黒い女房(にようぼ)とが、声を揃へて流行(はやり)歌を一(ひと)くさり歌つた。どんどんとその後(あと)でまた太鼓を打つた。欄干(てすり)の前に置いた大きい床机(しやうぎ)の上で弁当を開く近在の人もある。和歌山

の親類の客を迎へに停車場へ行つて居た番頭が真先になつて七八台の車が着いた。紹の紋附の着物を着た裏町の琴の師匠が来た。［＃「。」は底本では脱落］和歌山の客は皆奥で湯に入つて居るらしい。杯盤や切ずしを盛つた皿が持つて来られて、父も母も客も丁稚も皆同じやうに店で食事をした。通る地車の数が多くなつて、砂糖水はもう間に合はないで、奉書包みを扇に載せてその世話人達に番頭は配つて、橋の上に立つて大きい目をした張飛だの、加藤清正だのの地車の彫物を和歌山の客は珍しさうに見た。

『とても和歌祭にはかなひまへん。』

と父はその人等に云つて居る。街々の祭提灯に火が入(はい)るまでに私は三度程着物を着更へさせられた。行列の太鼓の音がほのかにすると家中の人が皆欄干(てすり)の処(ところ)に集(あつま)る。この家が船であつたなら一方の重味で覆(くつがへ)るであらう。猿田彦(さるだひこ)が通り、美しく化粧したお稚児が通り、馬に乗つた禰宜(ねぎ)が通り、神馬(しんめ)が通り、宮司の馬車が通り、勅使が通り、行列は終(しまひ)になつたが、神輿(みこし)はまだ大和橋を渡つたとか渡らぬとか群衆が云(いつ)て居る。黒い波のやうになつて道を通る人は皆南の方を向いて神輿(みこし)のお旅所(たびしよ)の方へ行(ゆ)くのである。浜の方からは神輿(みこし)の迎へに開運丸、住吉丸などと船の名を書いた旗を持

つた若者が幾人も幾人も走《はし》［＃ルビの「はし」はママ］しつて行《ゆ》く、四五町先へ神輿《みこし》が来た頃から危ながつて道端《みちはた》に居る人が皆店の上へ上《あが》つて来る。幾千の弓張《ゆみはり》提灯の上を神輿《みこし》が自然《ひとり》で動くやうに見えて四方に懸けた神鏡《しんきやう》がきら〳〵として通つた後《あと》二三十分で祭の街は死んだやうに静かになつて、海の風が藻《も》の香《か》を送る。

底本：「精神修養」
１９１１（明治44）年８月号
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の旧字を新字にあらためました。
※底本の総ルビを、パラルビにあらためました。
※脱落が疑われる、『旦那様、ありがたう。御寮人様、ありがたう。』の後の改行を補いました。
入力：武田秀男
校正：門田裕志
２００３年2月16日作成

２００３年5月18日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。